愛知県内に築かれた室町時代の河川堤防の考察

安井 雅彦[1]　　冨永 晃宏[2]

[1]正会員　株式会社パスコ 中部事業部 名古屋支店（〒460-0003 名古屋市中区錦 2-2-13）
E-mail: masahikomotive@yahoo.co.jp
[2]正会員　名古屋工業大学大学院教授　社会工学専攻（〒466-8555 名古屋市昭和区御器所町）
E-mail: tominaga.akihiro@nitech.ac.jp

愛知県尾張地方西部の海部地域には，南流する木曽川派川の一つを室町時代に締切り，西南方向に流れを導いた痕跡が認められる．兼平堤と呼ばれたこの締切りのための堤防は，江戸時代後半の大規模な治水工事によってその機能は不要となるが，この堤防の築造は織田弾正忠家が尾張統一の際に経済的基盤とした，川湊と津島神社門前の町の津島の繁栄につながる．しかし兼平堤の築造時期と誰によって築造されたかについての記録はない．一方同県内には西暦 1400 年前後に築造されたことが伝えられる 2 か所の堤防があり，当時の政治状況から兼平堤の築造はこの 2 か所と同時期と考えることができる．合せて 3 か所の治水工事が進められたのは，室町幕府第三代将軍足利義満が北山殿として最も権勢を揮った時期であり，将軍権力の拠点であったこの地域で，幕府が治水工事により耕地の拡大を目指したものと推測される．

Key Words: *embankment for cultivation, the Muromati shogunate, river port, change of flow*

1.　はじめに

(1)　この研究の目的

愛知県愛西市に細長く続く一連の 4 つの字（あざ）の区域があり，その字名には「古堤（ふるづつみ）」が使われている．この区域は延長が約 2,000 m あり，延享五年（1748）の「津島之圖」に「かねひら堤」と記されている部分に当たる．この兼平堤は江戸時代後半の大規模な治水工事以降，堤防としての機能は備えていないが，室町時代末期にはこの地域の耕地の開発や舟運に重要な役割を果たしたものと考えられる．しかしどの時代に，誰によって築造されたかは記録には現れていない．この研究では，兼平堤の築造時期，築造の背景などを，同県内で室町時代に築造された年代の比較的特定し易い他の堤防の例と比較して推測しようとするものである．

(2)　参考文献など

兼平堤の成り立ちについて記述した文献はなく，またこれに関する研究もなされていない．兼平堤は津島と清須を結ぶ街道となり，江戸時代には名古屋から津島へ向かう 2 つの街道のうちの北側のルートであった上街道あるいは巡見使の通る巡見街道となる．上街道沿いの集落のある津島市兼平町には兼平堤の表示はあるがその役割についての記載はない．

兼平堤の続く愛西市の旧海部郡佐織町役場付近から南へかつて大きい流れがあり，海部郡が海東郡と海西郡に分かれていた時代の初期の境界がその流れであったとする記述は『佐織町史通史編』および『愛知県の地名』に見られ，その川跡の開墾について，あるいは戦国時代の郡境の変更については述べられているが，流れの締切りには触れていない．

2.　古日光川から津島へ向う流れへの切替え

(1)　古日光川の名残

伊勢湾北部の海部地域には低平地が広がり，その中を日光川が流れている．この日光川は今から 230 年ほど前の天明年間に始まる瀬違（せたがえ）工事によって，西南に流れていたものを南東の方向に付替えられて現在の姿になった．この付替えは，合流先の木曽川派川，佐屋川の河床が土砂の堆積で高くなり，排水が滞るようになったことで行われたが，その数百年前には日光川のすぐ西側に，南へ向かう川筋があったと推定されている．

この「古日光川」と呼ばれるかつての川筋にあたる付近には「河田（ごうた）」「古川」「埋田」などの川に関連した地名が見られ，江戸時代末期には長さ十数間の古代の舟が掘り出されている．また鎌倉時

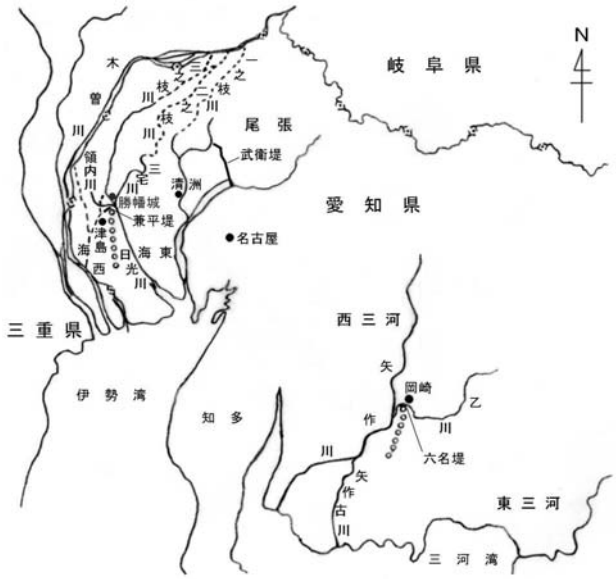

図-1　兼平堤と他の 2 つの堤防（六名堤・武衛堤）の位置

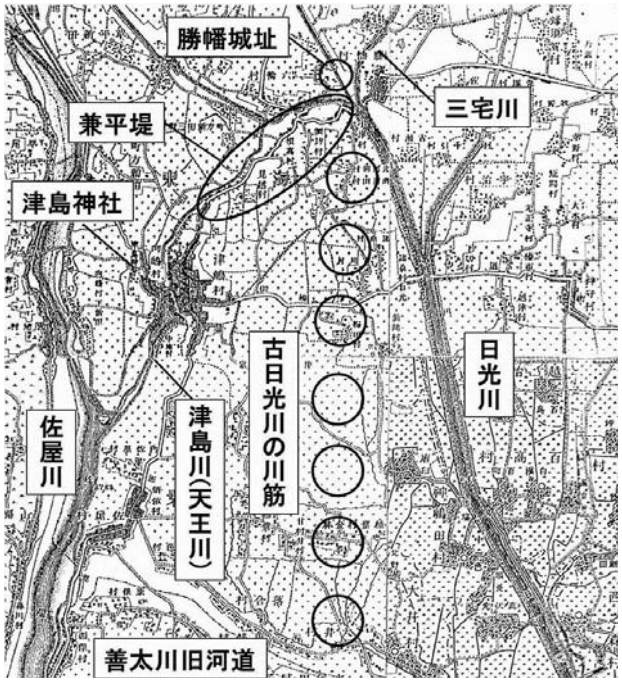

図-3　兼平堤と古日光川の川筋

代の海東郡，海西郡の郡境はこの川筋にあり，戦国時代末期の天正年間に別の位置に変更されている．それ以前のある時期に古日光川の流れは消えたことになるが，締切りなどを示す具体的な記録はない．

(2)　流れの切替えと津島の川湊

古日光川の流れを西南の方向に切替えることで，河田，埋田に見られるように水田の開発と，切替えた先にある津島の川湊の機能の向上が可能となる．古日光川の上流は木曽川の尾張側派川の，江戸時代初期の締切り前の二之枝川下流，現在の三宅川であった．伊勢の国から尾張の国への入口であった津島は三之枝川の下流に面していたが，二之枝川ともつながることは，水量も増えて舟運にとって利点となり，交易圏も広がる．

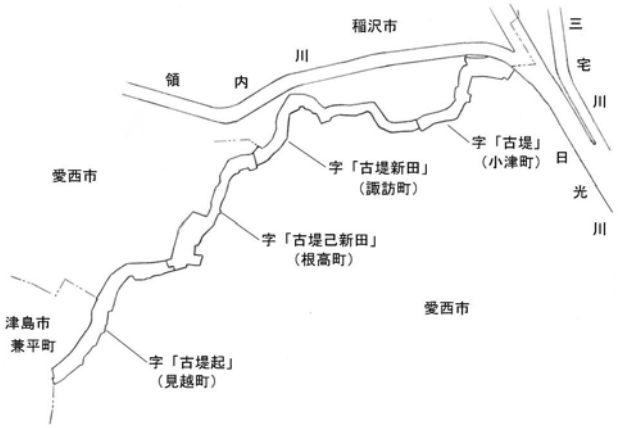

図-2　兼平堤の存在を推測できる 4 つの字のつながり

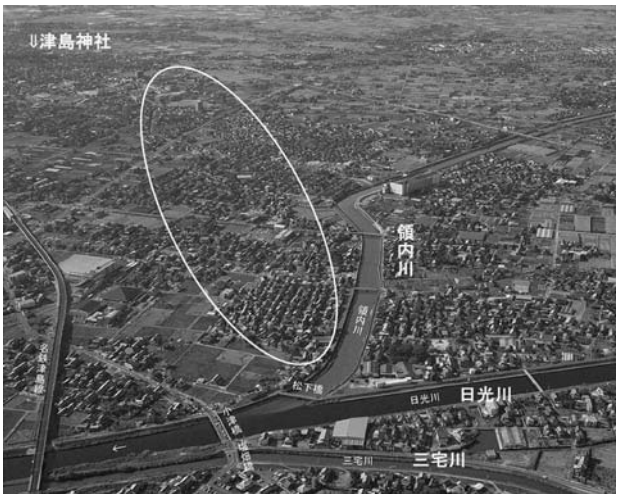

写真-1　日光川から西南へ長円の部分に兼平堤が続く

古日光川を締切り，流れを導いた兼平堤の約 2, 000 mの区域では, 字の幅は 20 mから 30 mとなっていて堤防敷を示していると考えられる．現在では北側が埋め立てられているため崖のような地形となり，その南側の田面から天端までの比高は最大 3 m ほどである．元禄十五年（1702）にはこの兼平堤が決壊して海東郡は大水害を被っている．

戦国時代にこの地域で勢力を持ち始めたのは織田弾正忠家であった．織田信定が勝幡城を築き，信秀，信長と続く．信秀の時代に那古野城（現在の名古屋城の場所）を今川氏から奪ってこれに移るが，この織田氏は，当時の尾張で清須に次ぐ集落の形成がある津島を重要な領地として掌握し経済的基盤とした．津島は勝幡城の下流 3. 5km ほどの位置にあり外港として機能した．2 つの川が合流したあとの津島川（あるいは天王川とも呼ぶ）には左岸に津島の川

写真-2　兼平堤の場所の崖地形

写真-3　岡崎市の中心部と乙川

湊があり，川を隔てて対岸には天王信仰の総本社である津島神社がある．

津島が織田氏の支配下となったころの大永六年（1526），連歌師の宗長は津島に立ち寄り，「此所のおのおの堤を家路とす．橋あり．三町あまり．勢田の長橋よりは猶遠かるべし」と「宗長手記」に記している．津島神社へ渡る天王橋は長大な橋と表現されていることから，すでに津島川の水量は豊かになっているとみられ，織田氏が勝幡城に拠点を置いた後に兼平堤を築いたとは考え難い．

3.　六名堤と武衛堤の築造の時代

(1)　乙川の開削と六名堤（むつなづつみ）

愛知県西三河地方の岡崎市中心部を流れる乙川は市街地を西へ流れて矢作川に合流する．現在のこの地形は西暦 1400 年前後に形成されたもので．それ以前は岡崎城の東の地点で南へ屈曲して流れていた．その流れが切替えられた大よその時期が，応永六年（1399）に室町幕府から三河守護の一色詮範（あきのり）にあてた文書から判る．

文書の内容は，六名堤を築造したことによる元の川筋で生じた用水不足への対策として伏樋をするが，川下から異議が出ないように触れよ，と命じる

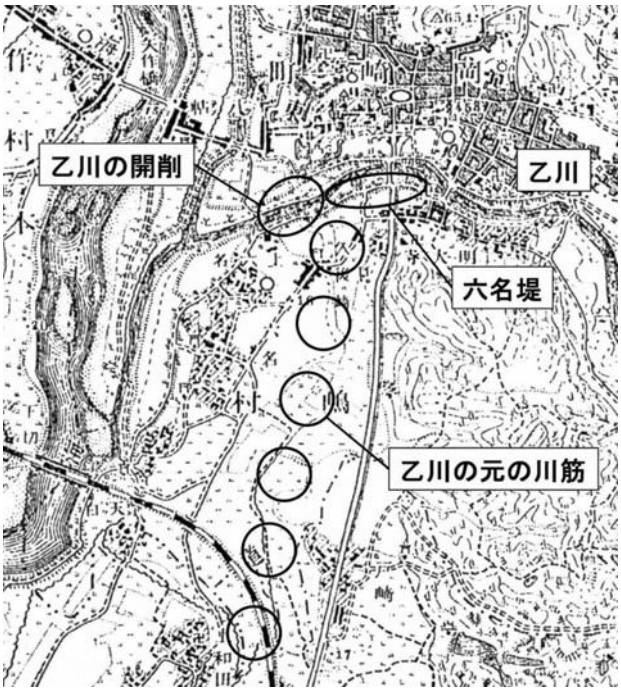

図-4　乙川と元の川筋

もので，この年以前に切替え工事が終了している．

大規模な掘削と築堤をともなう工事の目的は，乙川跡の水田としての開発，矢作川からの舟運を容易にすること，および後に岡崎城が築かれる台地を要害とすることと考えられ，この工事は幕府により行われたと岡崎市史では推測している．それは，三河は足利氏にとって本貫地の下野国足利に次ぐ拠点で，乙川下流の矢作川沿岸は足利一門の吉良氏，今川氏，一色氏などの一族領であり，乙川の流れの切替えが実行し易かったことによるとされる．

(2)　清須と武衛堤（ぶえいづつみ）

愛知県尾張地方を流れる庄内川の，右岸側の大蒲，喜惣治一帯は支流の大山川などが庄内川に合流する地点に近く，西暦 1300 年代までは豪雨の際にはこの地点に氾濫し，その水が西方の村々に流れ込んでいた．このため尾張守護の斯波義重は，政所の清須に接したこの地域の水害を除くため庄内川から北に向けて堤防を築いたとされる．斯波義重（のち義教）は足利一門の有力家，斯波氏武衛家の一員であり，父義将は管領として幕府内でゆるぎない地位にあった．この堤防が武衛堤と呼ばれるのはこれによる．

清須東方には，庄内川右岸と五条川左岸の自然堤防がつながり，それに囲まれた後背湿地が広がっていた．この地域の開発には大山川，庄内川の氾濫水を防ぐ必要があり，応永七年（1400）に尾張守護となった斯波義重は，まず武衛堤の築造に取り掛かったと考えられる．この時代にどの範囲で堤防が築かれたかは不明であるが，現在の庄内川右岸から五条

図-5　武衛堤の位置（※印が武衛堤と推定される地形）

川左岸までの延長は約 7, 000 mに及ぶ.

4.　兼平堤の築造時期の考察

(1)　尾張の守護

兼平堤が築造された時期は織田弾正忠家が勢力を拡大する時代よりもかなり以前と考えることが妥当である．六名堤と武衛堤の築造は西暦 1400 年前後でありこれと同じ時期であることが推測される.

六名堤は一色詮範が三河守護であった時に築造され，武衛堤の築造は斯波義重が尾張の守護であった時のことである．ともに足利一門で，幕府内で有力な存在であり，守護大名は在京していたので将軍の意向が直接伝わることになる．岡崎市史では六名堤の築造には守護の一色詮範は関わらず幕府が直接行った事業であろうと推測しているが，武衛堤の築造も同様に幕府の関与が大きかったと考えられる.

当時の尾張の国は分郡守護となり，知多郡，海東郡および海西郡には別の守護が置かれた．一色詮範は三河守護とともに知多郡，海東郡の守護も兼ね，海路として重要な地域に勢力を広げていた．このため兼平堤の存在する海東郡においても三河の場合と同じように幕府が築堤工事を実行することが出来たと考えられる.

写真-4　庄内川右岸から長円の方向に武衛堤が続く

(2)　足利義満の権力

室町幕府第三代将軍足利義満は，南北朝を合一させ（元中九/ 明徳三年（1392）），応永元年（1394）に将軍職を嫡男義持に譲るが政治上の実権は握り続け，その年太政大臣にまで昇進する．また明徳の乱（明徳元年（1390）），応永の乱（応永 6 年（1399））により反対する勢力を抑えていった．明徳の乱では尾張守護の土岐氏を計略により討ち，その後尾張守護には足利一門を据えていく．その時期は義満が北山殿として権勢を最も揮った時であり，尾張守護の斯波氏，海東郡守護の一色氏を通して，治水工事を含む地域の開発を足利義満の権力によって幕府自らが行ったとすれば理解し易い.

5.　まとめ

兼平堤の築造について，足利一門の一色氏の領国の中で，水田の開発と舟運の便のため室町幕府が西暦 1400 年前後に古日光川の流れの切替えを行ったのではないか．海東郡が一色氏の守護であった間に兼平堤が築造され，流れの切替えが行われたとすれば，宗長手記の記述の時期までに約 100 年を経てその効果として水田地帯の生産力が増し津島が発展した時期に，織田氏がこの地域を拠点として尾張統一を進めていくということになる.

参考文献

1)　津島市：津島市埋田遺跡発掘調査報告, 1968. 10. 25
2)　津島市教育委員会：津島市史（五），1975. 3. 20
3)　佐織町役場：佐織町史 通史編, 1989. 11. 3
4)　岡崎市：新編岡崎市史 中世 2, 1989. 3. 31
5)　愛知県郷土資料刊行会：北区の歴史, 1985. 11. 15
6)　三鬼清一郎：愛知県の歴史, 2001. 1. 10

（2017. 4. 10 受付）